震災復興支援への薦め

本庁支部　水産振興課　野崎貴廣

私は昨年の８月～９月の２ヶ月間、宮城県の石巻へ「漁港施設」の災害復旧支援に行かせていただきました。震災直後から行政支援などで行かれた方も多いと思います。現地の状況や災害復旧について特に感じたこと、伝えたいこと、どんな生活模様だったのかなど、実際に気になる部分も含めて書きたいと思います。

3 月 11 日から約半年後の７月末、私は宮城県の漁港施設の災害復旧支援のため、宮城県石巻市内にある大学構内の体育館に赴任した。体育館に行った理由はというと、本来業務をすべき石巻合同庁舎が津波により被災したため、市内にある大学構内の体育館を借りて業務を行っていたためである。沿岸部近くに位置する被災した合同庁舎を含め、市内のいたる建物が被災し、夏の時点ではまだ手つかずの家やお店もあり、被害の深刻さが伺えた。合同庁舎はようやく 9 月末くらいに使えるようになったくらいで、それまでに転々と県の出先機関や大学に引っ越ししながら業務を行っていた。

赴任先の体育館で待っていたのは本来合同庁舎内で業務を行っている様々な部署（県税事務所や福祉事務所など、福岡の合同庁舎と一緒の感じで）の職員の方々で、会議テーブルにパイプイス、エアコンもない業務用の扇風機に囲まれ、被災地での仕事がスタートした。

福岡県からは既に派遣されていた前任が２人いたため、「予想を越えるすごい状況だった」という話を事前に聞いており、ある程度の心構えはできていたはずだったのだが、現場に向かう車の中から徐々に変わる景色を見ながら、目的となる現場を目の当たりにしたときは言葉がでなかったことを今でもはっきりと覚えている。

がれきはずいぶんと片づいたようだったのだが、基礎だけの家、津波により倒れたビル、ビルに乗ったままのバス、川の中で無惨な姿のまま放置されている橋など、沿岸沿いの低地はほぼ全部と言っていいほど、普通では考えられないような光景が広がっていた。

特に管内で被害の大きかった女川漁港では、あまりの悲惨な光景に涙がでそうになった。小高い場所にたてられた町立女川病院は、元々津波常習地帯であることがわかっていたため、津波の想定を考えてたてられたという病院であったのだが、実際はその病院の１階まで津波がきたようで、想定外の津波高さだったということがよくわかった。それは現地でその病院の駐車場にたってみればわかるのだが、海を見下ろす眼下に見える海との高低差は約１５ｍ程度。目の前に残っているビルの高さでいえば４～５階建てくらいの高さまで津波が押し寄せて来たことになる。

「それくらい想定できるだろう」と思われる方もいるかもしれないが、現地に立ってみて初めて、この高さは想像できないということがわかるだろう。

それくらい、自分達が常識範囲内と思い込んでいる高さと、自然の力の差は歴然としていたのである。

管内でも被害の特に大きかった女川（おながわ）漁港。

この高さまで津波があがってきたらしい

その後も管内の現場を巡り、まともに残っている施設は一つもないということがわかった。なぜかというと、流出、破損はともかく、すべての沿岸部は地盤沈下で最大２ｍ近く沈下しているところもあり、背後の集落が全部なくなっているところもあったからだ。災害報告的に言うと、管内の漁港施設は全箇所被災、ということになる。

一部ではすぐに漁業が再会される箇所のみ応急工事をした部分はあったが、それ以外はとても漁業ができるような状態ではなかった。元通りになるにはあと１０年以上かかるのではないかと思った記憶がある。

現場を見るのもほどほどに、査定の準備は初日から（というか引継で来た７月末から）始まった。

配属先の東部地方振興事務所に派遣されているのは全国から１１人。東京、徳島、高知、福岡、大分、熊本、宮崎と、とても頼もしい（楽しい）メンバーがあつまっていた。中には阪神淡路大震災、中越地震での災害復旧経験者もおり、非常に心強かった。

引継ぎで行った初日から、すぐに分担された仕事（査定設計所の作成）に取りかかることになった。

一番困ったのは予想どおり、積算システムの違いで、若手を捕まえてとにかく聞きながらなんとか作りはじめた。これは新規採用の気分だったのだが、人間、必要に迫られると意外と何とかなるものなのだということがわかった。

夏の体育館の暑さと慣れない環境、片道１時間超の派遣組での共同通勤、毎日深夜までの残業と、なかなかのハードなスケジュールではあったものの、東北の人達の大変さを見聞きしていたので、弱音をはくこともほとんどなく、派遣組の想いは「査定を終わらせること」一つに集中できた。

地盤沈下により水没している漁港

査定中

被災直後は仕事ができる環境ではなかったようで、設備が全くない状態で、片付けしかすることがない日々がしばらく続いていたようだった。その後も事前協議やルールづくり等でなかなか作業が進まず、７月になってからようやく１次査定がはじまったようであったが、９月あたりからは隔週での査定で、査定中は体育館の寝泊まり作業もでてきた。

査定も回を重ねるごとに精度が落ち、現場を見ずに作った設計書と現地のものが違うということが査定中に判明したり、時間のなさと準備をする暇もない状況のなかで苦労しながらも少しずつ進めていった。

査定中、とある査定官が来られた時、某県の派遣職員とお友達ということがわかり、（過去その県で大災害があった時、何度も本省に出向き、仕事や仕事以外でも親睦を深めていたということだった。）おかげでいろいろな話を聞く時間を設けてもらったりして、非常に有意義な時間を過ごすことができた。その二人のやりとりを見ていると、とてもいい関係が築かれているようだった。（しかも数年ぶりに会う二人だったのだが、査定官はしっかり覚えてくれていたようで、とてもいい関係だなということが見て取れた。）

ちょっと昔の雰囲気という感じを受けるかもしれないが、そこは仕事になれば公私混同はもちろんないし、このような機会に巡り会うこともなかなかないので、人とのコミュニケーションや人とのつながりというのはとても重要だと感じた。

現代はよく人間関係が薄いなどと言われているが、やはり時間をかけて築き上げた信頼関係と、それにより一歩踏み込んだ議論ができるというのは、非常に重要なことだと改めて感じたところである。

仕事は大変なのは最初からわかっていたことだったので、仕事の内容は決められた作業（設計書の作成と打ち合わせ）が多く、意外とスムーズに進めることができた。
コンサルタント業界でも、全国の支店から東北に人材を派遣し、業務分担を各支店に分担したりと、会社を上げて東北支援を行っている部分もわかった。福岡で仕事をしていたコンサルタントの担当者と顔を合わせたときは九州から、というだけで頼もしく思えた。
忙しいのは忙しいのだが、仕事を進めて行くことにそれほど抵抗を感じなかったのは、こういった周囲のメンバーと、いろいろなところで出会う人達に恵まれていたおかげだった

と思う。わからない部分は教えてもらい、自分のできるところで手伝い、手伝ってもらった。この小さな職場の中でも「絆」、「つながり」というのを強く感じた時間であった。

とまあ仕事の話はこのくらいにして、今度は少しプライベート時間の過ごし方はどうだったのか、気になる方もおられるかと思う。実はこの時間の過ごし方が一番よかったわけで、この時間がなければただ疲れるだけの日々となっていただろう。
忙しいとはいいつつも、週一回の休日（週１日は休みを取る方針だった）は毎回楽しみにしていた時間で、いつもなら家族サービスをしないといけないところだが、ここは東北、つかの間の単身赴任中である。わずかな時間なので、時は金なりということで、寝て過ごす日はほとんどなく、出歩き回った。
東北にはいざ行こうと思ってもなかなかいける機会はないし、夏休み期間ということもありいい機会だったので、青春１８切符をフル活用して楽しむことにした。
宮城県は水産県でもあり、特に魚がおいしい。（カツオや秋刀魚はすばらしかった）さらにはうまい米（コンビニおにぎりも違う！）とうまい酒（特に日本酒）、温泉や東北で最大の繁華街、仙台の街もある。（これだけでももうたまらんという人もいるはずだ）まとまった休みがないので、短期間ながらもずいぶんと宮城県の近隣の県にお邪魔しながら東北を堪能した。
休日がすばらしくリフレッシュできたのは、オンとオフの切り替えがとてもうまくいっていたからだと思う。ガチンコ勝負の合間のゆるい時間が必要なのと一緒であろう。
少しの時間でも頭のスイッチを切り替えて目一杯遊ぶことはとてもいいことだと改めて実感した。誤解を受けるかもしれないが、決して遊びまわっていたわけではなく（コレだけは言いたい）、東北の観光地を回り、お金を使いまくった。東北の品物を買うということは間接的にも十分支援と呼べる（と自分に言い聞かせながら楽しませてもらった）。
みなさんも東北に行く機会があれば是非、観光、グルメ、その他色々しっかり楽しんでいただきたいと思う。

また、それに加え派遣の人たちとは宿舎の近くによく酒を飲みに行った。その近辺にすむ職員の方に、おすすめのお店はどこかを訪ねると、「俺より知ってるから教えるとこはねぇ・・。」という言葉が返ってくるほど派遣職員グループのデータベースは充実しつつあった。
目論見書の提出後、査定後、週１日の休みの日、メンバーの交代時など（半ば強制的といってもいいかもしれない）、とにかく顔を合わせて話せば話すほど、みんなが一つのチームのような雰囲気となって仕事をすることができた。そこまでやらずとも一日の時間うち８割弱を一緒に過ごしているから、大げさに言えば家族みたいな感じだといってもいいくらい、打ち解けていた。（例えるならみんなと接するときはパンツ一丁で、的な付き合いだった）
それだけに派遣期間が終わりに近づき、最終日を迎えたころは帰ることができるうれしさ半分、皆と別れる寂しさが半分といった複雑な心境になった。

派遣メンバー
＋宮城の職員

中央埋もれているのが私

最後の日は仙台市内で日付が変わってからも親睦を深め、翌日、一人、また一人と帰路についた。

別れ際、長い時間を共に過ごしてきた仲間が、何かをいいたくても誰も言葉にならず、無言で握手をかわし、「また会いましょう」と一言だけ挨拶をしたときは、さすがにグッとこみ上げるものがあった。男の友情ってなんかいいなぁ、と思った。

その後、福岡へ戻り、宮城でお世話になった若手から年末の１２月２９日に電話があり、２８日で無事査定は終了したとの連絡があり、今日（２９日）まで仕事をしていますという話や近況報告を聞けたことは、九州に帰ってきてからも内心うれしかった。

年が明ければいよいよ工事着手に入る。地元調整など、大変な作業が待っている。
査定を受けるよりもさらに難しさは増すと思われるが、まだまだ人手が足りないことは目に見えている。全国知事会を通じ、派遣要請があるのはあるが、現在出先事務所は職員数も減り、係によっては人手がなくなるというところもあるだろう。

しかし、もし係員、上司の理解を得ることができるのであれば、是非東北の地へ支援に行くことをおすすめしたい。

なぜかというと、まず直接現地の生の状況を見ることができる。今やテレビや新聞などで毎日のように記事や映像がテレビで見られるのだが、やはり現地で直接見るのはぜんぜん違うことがわかる。百聞は一見にしかずという言葉はまさにこのことなのだと思う。

我々は普段災害とはほぼ縁のない、恵まれた生活を送っているのだが、時として自然は猛威を振るうということを忘れてはならない。人間は到底自然の力にはかなわないということも今回の震災で改めてわかったはずである。災害には必ず過去の規模を越える災害が来るということも頭に入れておくべきだ。また、九州には津波に関する歴史的記録がないため、津波は来ないだろうと考えるかもしれないが、災害は津波だけではなく、雨や台風や落雷など、想像できる災害はたくさんあるはずであるし、実際、ほんの 10 年ほど前にはなかった、局所的大雨も近年は多発している状況もある。

普段に生活できることがどれほど幸せなことなのか、あらためて思い知らされた今回の

経験であった。

東北で幸いに助かった方々は、今でもいつになったら元の生活に戻るのかも見えない不安な状態が続いている。地元の人たちは少しでも早く復興してほしいと願っているだろうが、今の国の制度では限度があるし（査定官も少しそのような話をされていた）、重要なライフラインである公共施設の復旧を行うことは自治体職員以外にはできない仕事でもある。
今、東北で一番多く求められている職種のうちのひとつは我々土木技術者である。東北では職員の方も被災し、仮設住宅から出勤しながら仕事をしている人たちもいる状況もあるということも知っていていただきたい。
近年、土木職はどちらかというと何かにつけてバッシングを受けやすい職種ではあるが、東北ではこれほどありがたく思われる職種は無いというのも事実である。

震災から時間が経っており、なんとなく記憶が薄くなりつつある時期ではあるが、復興にはざっと考えても 10 年はかかるだろう。
いつになるかはわからないが、東北が復興し、東北の方々に余裕ができるようになれば日本はぐっと持ち直すはずだ。お世話になった若手は常々、「いつか九州に行ってみたいですよ」と、嬉しいことを言ってくれた。九州からの派遣の人間が多いことも一因ではあるようで、きっとこのような話は様々な場所であるはずである。
復興のために世界中からの支援があり、日本中からもいろんな人たちが支援に行っている。今まで知らなかった土地を身近に感じられることができたのは支援に行かせてもらったおかげである。
支援に行くのをためらっている方、是非手を上げて行ってみてはどうでしょう。その経験は必ず今後に活きる糧となりうると思います。
私が支援に行ったのは、まずは査定の支援がひとつ、もうひとつはこのような状況をいろんな人に話し、東北へ支援に行ってもらうことも役目のひとつだと思っています。私は東北各県の職員ではありませんし、福岡県の仕事もあるのにそれでも行ってほしいとはいえる立場ではないこともわかっていますが、現場の声が伝わっていないようなので変わりに言わせてもらうとすれば、「是非、支援をお願いします」とだけはお伝えしたい。

最後に、この支援に行くにあたりましては、様々な方面からのご支援をいただきましたことに深く感謝申し上げます。また、今後も引き続き、東北への継続的支援についてのご配慮をいただければ幸いです。